性差では男40.7%，女59.3%であった。初診時症状別頻度（表4）では，発熱，頻尿，腹痛，排尿痛などが多く，また年齢別症状頻度（表5）では，年少児になるにつれて，発熱のほか，食思低下，下痢などがみられた。起炎菌では E. coli, Klebsiella, Pseudomonas などが多く（表6）また年少児ほど（表7）E. coli. の頻度が高い傾向がみられた。

以上，今回は，小児尿路感染症について，年齢別，性別，症状別起炎菌別頻度について集計した成績について報告した。

小児水腎症症例における腎機能と尿路感染について

名古屋市立大学泌尿器科　大田黒　和　生
新　美　明　達
辻　村　俊　策

はじめに

腎盂尿管移行部狭窄による小児水腎症症例に対して術前および術中に腎瘻を設置し，腎機能の推移を観察し得た21例について尿路感染の有無と腎機能について検討したので報告する。

対　象

1971年より1977年までに名古屋市立大学泌尿器科で手術を施行された腎盂尿管移行部狭窄による小児水腎症患者は21例で，男子17例，女子4例である。術前に経皮的に腎瘻を設置した症例は12例であり，全例とも術中に腎瘻を設置している。腎瘻留置期間は10日から1ヶ月である（表1）。

方　法

表2の如く腎瘻より得た1日尿において尿量，尿浸透圧，Na クリアランス，Cl クリアランス，K クリアランス，クレアチニンクリアランスを測定してその値の推移を観察した。そのおのおのの推移をパターン別に分類したのが図1である。

パターンⅠは腎瘻設置時に正常より高値を示したもので，腎瘻抜去時に正常値以上を示した群をA群，正常値以下となった群をB群とした。パターンⅡは設置時に正常値を示したもので，やはり同様にA群とB群に分けた。パターンⅢは正常値以下を示したもので，図の如くA群とB群に分けた。

表 1

UPJ 狭窄		
♂	17	生後26日～8才
♀	4	術後3ヵ月～88ヵ月
	21	

表 2

nephrostomic tube (percutanesees)
urine volume
Osmo. p.
Na—C_{Na}
Cl—C_{Cl}
K—C_K
Cr—C_{Cr}

結　果

腎瘻設置時に感染を認めたものは6例であり，感染を

表 3　成績（Ⅰ）

		UV	Os. P	C_{Na}	C_{Cl}	C_K	C_{Cr}
感染(+)	Ⅰ(H)	4	0	0	0	0	0
	Ⅱ(N)	2	2	1	1	2	1
	Ⅲ(L)	0	4	5	5	4	5
(−)	Ⅰ(H)	10	0	0	2	6	0
	Ⅱ(N)	5	2	6	6	4	4
	Ⅲ(L)	0	11	4	7	5	11

成績（Ⅱ）

		UV	Os. P	C_{Na}	C_{Cl}	C_K	C_{Cr}
感染(+)	A	6	4	2	2	2	4
	B	0	2	4	4	4	2
(−)	A	15	4	7	11	11	10
	B	0	9	8	4	4	5

認めなかったものは15例であった。そのおのおのについて各検査項目の値を比較したのが成績Ⅰである。腎瘻設置時においては尿量，尿浸透圧，クレアチニンクリアランスの値は感染有群と感染無群とでは差を認めないが，Na クリアランス，Cl クリアランス，K クリアランスの値は感染有群に比べ感染無群の方に正常値をとる率が高いことがわかる。

また腎瘻設置期間中のおのおのの値の推移をみたのが成績Ⅱである。Na クリアランス，Cl クリアランス，K クリアランス，クレアチニンクリアランスは感染を有する群に比べて感染のない群の方が通過障害の解除に伴ない，正常な値となる率が高い。ただ尿浸透圧はこの期間だけでみると感染のない群でも正常値以下を示す例が多いが，これは水腎症自身に尿浸透圧の低値を示すものが多く，少なくともこの期間内での上昇は認められなかった。

これらのことにより水腎症については通過障害を取り除くことが当然であるが，感染群についてはより早期に施行されることが望ましいと思われる。

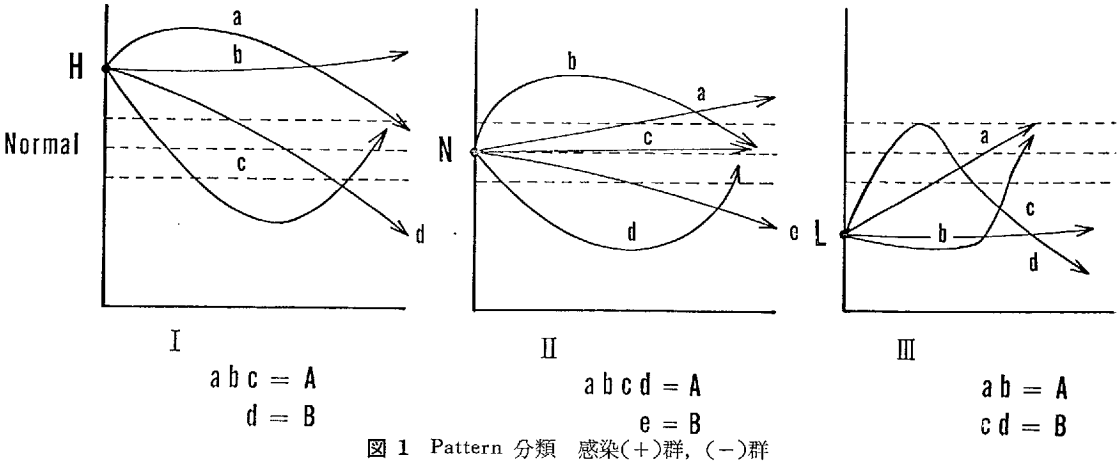

図 1　Pattern 分類　感染(＋)群，(－)群

小児尿路感染症の研究

千葉大学泌尿器科　片山　喬
安田耕作
岩間汪美
同　中央検査部　小林章男
同　小児科学　新美仁男

1. 千葉市学童集検により発見された無症候性細菌尿症例の検討

昭和52年度に千葉市内の小学生に対して行われた3次にわたる尿細菌検査の結果，77,950名中68名（0.09%）が有意義な細菌尿を有すると判定された。これら症例の尿蛋白陽性者は6例，尿沈渣では400倍視野で白血球1～5個22名，6～9個7名，10個以上39名であり，分離菌種は大腸菌60，クレブシエラ7，エンテロバクター1という結果であった。既往歴では腎盂腎炎5，膀胱炎11，熱を出しやすい26，遺尿38であった。この68例中13例に泌尿器科的検索をおこない，6例に VUR，3例に神経因性膀胱（うち1例は VUR 合併）を認めたが，他の5例には泌尿器科的異常を認め得なかった。この時発見された VUR の程度は進行したものが多く，集検の有用性を示すものと思われる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

はじめに

腎孟尿管移行部狭窄による小児水腎症症例に対して術前および術中に腎瘻を設置し,腎機能の推移を観察し得た 21 例について尿路感染の有無と腎機能について検討したので報告する。